

「公務員は恵まれている、大阪市役所をぶっ壊す」と叫ぶ政治家が出現すると、多くの市民が簡単に共感してしまう。親が生活保護を受けている芸能人の話題が週刊誌やワイドショーで繰り返され、「生活保護を受けながらベンツに乗っている人がいる」などというコメントがまことしやかにテレビで流されると、「今の生活保護制度はおかしい」と多くの国民が言い出す。実際、私のボランティア仲間は「働ける若者が生活保護受給者なんてとんでもない」と憤慨していた。

人間、ぼんやりしていると社会のできごとを表面的に捉えて、単純な主張やマスコミの論調に無批判に同調してしまうことが多い。

かつて、共同通信記者だった斎藤茂男は、取材とは現象から本質をとりだすことだと述べた。一見そう思えるもの（現象）から、本当の姿（本質）を見つけ出す作業だというのだ。（斎藤茂男『事実が私を鍛える』）

私達が現代社会を見るときに心しなくてはならないのは、少しでもことの本質を見抜く努力をすることだと思う。そのためには、冷静で地道な学習が必要になる。近現代史ゼミはそういう学習の場になっていると思うし、内藤真治講師は常に質の高い講義内容を維持し続けている。

近現代史ゼミは2000年1月に始まり、現在12年以上が経過した。今は、2ヶ月ごと（奇数月）第4土曜日の午後に実施している。誰でも参加できるので、多数の参加を期待している。

さて、昨年からは沖縄近現代史というテーマで3回、ゼミを行った。

沖縄は、かつて本土決戦のための捨石となり、現在も在日米軍基地の74%が集中している。「犠牲のシステム」という点では、原発事故の福島と共通するものがあるといえる。

ゼミの概要は次の通り。全体の解説は無理なので、一部の講義内容のみ紹介する。

沖縄近現代史① 2011・11・26

- 問題の所在①「沖縄を返せ」への違和感
 - 1、琉球と沖縄
 - 2、琉球王国時代
 - 3、琉球処分
 - 4、廃藩置県後の沖縄
 - 5、「ソテツ地獄」と日本一の移民県
- 問題の所在②—なぜあれほどまでの戦争協力を
 - 6、戦争動員とジャーナリズム—軍神の誕生
 - 7、沖縄戦とは何だったのか

《問題の所在①「沖縄を返せ」への違和感》

沖縄の祖国復帰運動の中で、主として本土の人間が歌った歌「沖縄を返せ」の歌詞に違和感がある。「♪…われらとわれらの祖先が血と汗をもて 守り育てた 沖縄よ」という部分。この「われら」とは本土の日本人のこと。沖縄と本土の人の間には、認識や感覚に大きなずれがあり、「小指の痛みは全身の痛み」になっていない現実がある。

《6、戦争動員とジャーナリズム…「軍神」の誕生》

1943年、ガダルカナル島で戦死した大楯松市中尉（与那国島出身）。その武功が「上聞に達せられたり」（天皇の耳に入った）と大本営が発表すると沖縄の各紙は一斉にそのことを記事にした。以後、「軍神大楯」ラッシュとなる。沖縄の社会全体で顕彰と戦意高揚の動きとなった。

コンプレックスをいだいていた沖縄の人々の中に軍神が一人出ると、後に続けという勢いになる。

沖縄近現代史② 2012・1・28

(1) 菊池実さん(県埋蔵文化財調査事業団)の特別講義

- ①1945(昭和20)年2月16日・館林上空の空戦を追って
- ②沖永良部島へ一不時着した特攻隊員を追って
- ③戦争遺跡の取り扱いの過去と現在

①1945年2月16日、米軍艦上機により中島飛行機太田製作所と小泉製作所が空襲された。このとき、邀撃に飛び立った日本軍の飛燕2機が撃墜された。1人は沖縄出身の新垣安雄少尉であった。

②陸軍前橋飛行場(堤ヶ岡飛行場)で特攻訓練をつんだ36名の隊員の名をたずねた。36名のうち、戦没者は32名、生還者4名、現在、唯一の生存者は原田覚伍長(当時)。

(2) 内藤講師から

- ①いわゆる「大本営発表」の実態
- ②「特攻隊員 岡部三郎伍長」のこと

《②「特攻隊員 岡部三郎伍長」のこと》

大戦末期の1945年、陸軍前橋飛行場(堤ヶ岡飛行場)で特攻隊の訓練が行われていた。勤労奉仕で出かけた前橋高等女学校(現前橋女子高校)4年生の細野光枝さんは人形の背に血書の手紙をしのばせて特攻隊員におくった。返事が細野さんに届く。名前は「陸軍特別攻撃隊員 岡部生」としか書かれていなかった。

後年、前橋女子高校の内藤真治教諭はそのことを知り、特攻隊員の岡部は香川県出身の岡部三郎であり、沖縄特攻作戦で戦死(当時24歳)していることを確認。さらに次のようなこともわかった。宮崎県の新田原基地を飛び立った岡部は沖縄沖で米輸送艦カスウェル号に突入、遺体は米軍によって水葬されたが、岡部が締めていた鉢巻きを米軍医が持ち帰った。後に、その鉢巻きは日本人留学生に託されて日本に戻り、今は知覧の特攻会館にある。

沖縄近現代史③ 2012・5・26

「プロローグ」…「フクシマ・沖縄」そしてバナナあるいはエビ

1なぜ戦後の沖縄は長期にわたって米軍の占領下におかれることになったのか

※昭和天皇の「沖縄メッセージ」

2なぜ米軍基地は沖縄に集中しているのか

3「銃剣とブルドーザー」…フクシマとの違い

5復帰の現実—「返還協定反対」と「密約」

《5 復帰の現実—「返還協定反対」と「密約」》

①核密約(ニクソン大統領と佐藤栄作首相との間の密約・1969年11月21日)

施政権返還までに沖縄の核兵器は撤去するが、極めて重大な緊急事態が生じた際には、事前協議を行った上で、核兵器を沖縄に再び持ち込めるといふもの。京都産業大教授・若泉敬が佐藤首相の依頼で密使として交渉、努力したが成果なし。

結局、日本国民が知らされたのは、表向きの核抜き本土並みということだけだった。

②西山事件

佐藤内閣の1971年、沖縄返還協定に際し、「アメリカが地権者に支払う土地現状復旧費用400万ドルを日本政府がアメリカに秘密裏に支払う」といふ密約。

毎日新聞の西山太吉記者が外務省の女性事務官を通して外務省極秘電文を入手、これを提供された議員によって国会で追及された。しかし、西山と女性事務官は国家公務員法(守秘義務)違反として逮捕、起訴された。そして、週刊誌が西山記者と女性事務官の不倫関係をスクープし、検察が起訴状に「ひそかに情を通じ」と記載するなど、世論は西山記者と女性事務官を非難する論調一色になっていく。密約の中身や国民の知る権利などから男女関係へと論点がすりかえられていき、毎日新聞の不買運動から事実上の倒産にまで至った。

《文責・設楽春樹》